特集
まえがき

日本科学者会議60年の今までとこれから

竹内　智，鄭　幸子

創立60周年の日本科学者会議（JSA）と同時に，市民と科学者を結ぶ総合学術誌『日本の科学者』（JJS）も創刊60周年を迎えることから，本記念特集号が企画された．JSAは1966年3月に創立された．戦後復興から数十年で経済大国へと変貌する中，社会インフラが整備され物質的豊かさが実感されはじめた裏側で，経済優先の乱開発により公害列島といわれるほど自然環境が破壊され，健康被害が拡大した時代でもあった．

本特集では，60年にわたる時代の変遷を概観し，今後のJSA活動の在り方について竹内が言及した．

宮本氏は，1960年代の公害を振り返り，被害者の救済と公害防止に向けた法制度の整備や行政による企業監視の強化，革新技術の安全性検証など，多面的な取り組みに触れたインタビューをとおして，公害に反対する市民活動と科学者の協同がどのように進められたのか，また，将来に向けて，科学者が果たすべき役割は何なのかを明らかにした．

戦後の民主化が進む中で組織化された民主主義科学者協会（民科）は，1957年に活動停止となったが，民科の部会であった地学団体研究会で活動してきた後藤氏から，当時の活動状況について報告を受けた．民科や他学協会の活動経験がJSAの創立とその後の発展的な活動に生かされたと指摘．また，未来に向けたJSA活動の方向性についても言及した．

JSAへの提言も含んだ論考も特集には掲載されている．鄭は科学誌Natureを引用しながら，「これから」するべき具体案についてDEIA（多様性・公平性・包摂性・参加しやすさ）を軸に論じた．ウィックストラム氏は，立場により見えるものが異なるにも関わらず，マジョリティ男性の視点が科学的な視点として長年用いられてきた限界と危険性を説く．関連して廣森氏はマジョリティや男性の優遇状態を「下駄を履かせる」という表現と対比しながら，自らの特権をも俎上に載せ，振り返る．教育者や研究者は，往々にして講義したがるが，林氏は他の人々の意見を聴き，引き出すファシリテーション力をつける重要性を，JSAの取り組みを踏まえ検証する．

本誌「ひろば」は，若手会員がJSAの今後10年を見据えた座談会となっており，若手会員が増えるには何が課題なのか，JSAがどうあるべきかなど示唆に富む内容である．

さらに本特集では，JSAの創立期に学ぶとして，創立に向けた経過報告と総会で採択された宣言，『日本の科学者』を広めるための呼びかけの3つが資料として掲載されている．創立時の状況を知るうえで貴重な資料となることから再掲することとし，次号2月号にも，『日本の科学者』創刊号に掲載された坂田昌一氏の論稿「現代科学の性格」が再録される．当時の最先端研究であった原子核物理学を中心に，原水爆や原発，学術会議問題，科学者の社会的責任，「大学の自治」と「学問の自由」，さらには平和への想いなど，60年を経た今でも興味深い内容となっている．

本特集は，JSAの存在意義を再確認し，未来に向けた科学者運動を考えるうえでも有意義な内容となっている．

（たけうち・さとし：JSA事務局長，
JJS編集委員長，環境科学）
（ちょん・へんじゃ：岡山大学，文化人類学）